

海外で働くということー台湾での出会い

今回、「台湾で働く日本人公認会計士」をテーマに台湾 EY で働く橋本先生と川口先生のお二人からお話を伺った。インタビューを基に、お二人が「なぜ台湾で働こうと決めたのか」と、お二人が感じる「海外で働くうえでの苦勞」について言及していく。



台湾で働くという選択、そして直面した壁

まず、お二人が台湾を選んだ理由をみていく。橋本先生と川口先生のお二人には昔から「海外で働きたい」という強い思いがあった。そして、日本で経験を積んだ後に新しい挑戦を求めて海外勤務を決意したとおっしゃっていた。

中でも台湾を選んだのは、EY 台湾が多様な挑戦の機会を提供していること、そして日本人が生活しやすい環境が整っているからだと述べていた。医療や食事の面で安心できる台湾は、日本企業も多く、暮らしやすさが大きな魅力だと話されていた。

次に、海外で働くうえでの苦勞についてだ。まず、「文化の違い」と「言葉の壁」を述べていた。台湾では意見をストレートに伝える文化があり、日本の間接的に表現する文化との違いに戸惑ったそうだ。しかし、お二人とも日々のコミュニケーションを通じて相手の文化を尊重し、適応

していったという。また、通訳を介するとニュアンスのズレが生じることもあるため、シンプルで直接的な表現を心がけていた。

我々も今回が初めての海外で、言語の壁を不安に感じていた。しかし、現地でジェスチャーや簡単な英単語を使って意思疎通を試みることで、「伝えようとする気持ちがあれば言葉は通じる」という大切な学びを得た。

今回の研修を通じ、海外でのキャリアを築くうえでの具体的なイメージを持つことができた。お二人の経験談から得た学びは、今後の我々のキャリアを考える上で大きな指針となった。



会計は文化の鏡である。その違いの裏に見える考え方の差

次に日本と台湾の会計基準の違いを書いていく。私がこのテーマを選んだ理由は、会計基準の違いが企業や投資家にどのような影響を与えるか気になったからである。今回は個人的に興味を持った3つの違いをまとめてみた。

1つ目は配当の課税のタイミングである。日本は決議で配当が決定するまで課税されないのに対し、台湾は配当しなくても未処理の利益に対して課税される制度があることだ。台湾は常に先を見据えていることが分かる。

2つ目は、費用認識の違いについてだ。例えば研究開発費を日本ではすべて費用処理するのに対し、台湾では開発段階で将来収益を生むと合理的に判断される場合には資産計上が可能である。このように、日本と台湾では投資に対する価値観も異なることが分かる。

3つ目はのれんの扱いについてである。のれんとは信用やブランド力といった目に見えない収益力を指す。日本では定期償却、無形固定資産として償却し、毎年こまめに費用化するが、これを台湾では償却せず、年に一度の減損テストで価値の低下をチェックする。

このように、日本は独自の基準を守りつつ保守的で利益を小さく示す傾向がある。一方で台湾は世界基準に合わせ、行動が早く、未来志向であると分かる。日本は慎重で安定性や信頼性を重視しているが、台湾のように、より積極的な基準を設けてチャレンジしていくことも大切だと思った。

台湾で様々な「違い」に直面しながらも、その都度対処して適応し、色々なことに挑戦されている橋本先生や川口先生と対話することができ、大きな刺激を受けることができた。これを機に自分を見つめ直し、将来の自身の姿についてよく考えていきたい。

台湾の半導体が世界を動かす

次に、台湾の経済が世界情勢によって受ける影響について述べていく。この話題を選んだ理由は、台湾は半導体産業を中心としてアメリカや中国、日本などの主要国と密接な関係にあり、世界市場に大きな影響力を与え、影響を受けている国だからである。そんな台湾の経済を分析することは世界全体の経済を知ることにつながると思い、このテーマについて言及していく。

台湾ではスマートフォンやAI向けなどの半導体の生産が盛んである。台湾の半導体産業の収益は台湾のGDPの約 18%で、台湾の輸出総額の約 40%を占めている。またTSMC社は世界最大の半導体製造企業として、世界の半導体チップの過半数を生産している。

そんな半導体にめっぽう強い台湾であるが、台湾有事が起これば危機的状況に陥ってしまう。台湾有事とは、台湾に対する中国の軍事侵攻などの一連の事態を指す言葉である。

台湾有事が起これば、台湾だけでなく世界中の半導体を必要とするサプライチェーンが混乱し、スマートフォン、AI、システムなどが止まることになる。そうすると、中国の世界での立ち位置が危うくなるので、今のところは中国がそこまでするリスクはとらないとされている。しかし可能性はゼロではない。

そんなもしもに備えて、台湾は軍事的な防御だけでなく、政策として半導体産業への設備投資などの支援を行っている。台湾がグローバルサプライチェーンの中で重要な地位を確立し、経済という武器を手に入れることを目指している。そのため、台湾では政府と経済は切り離せない関係にあり、台湾経済を守る意識が強いと言える。

日本でも、世界の様々な脅威から身を守る一つ的手段として、産業を強く育てる経済政策が有効かもしれない。

働き方にもじむ国民性、不平等の是正を目指して

次に日本と台湾の働き方の違いに触れる。このテーマを調べた理由は、日本だけでなく台湾の働き方を知ることで、自分により適したキャリアや、海外で働く可能性を見つけられるのではないかと思ったためである。そして、台湾と日本では大きく 2 つの違いがあることを知った。

1 つ目の違いは、ワーク・ライフ・バランスの充実である。台湾の方が日本より、これらのバランスが整っている印象を受けた。日本では一昔は繁忙期は深夜 3 時まで仕事をし、残業時間が月に 200 時間を超えることもあったそうだ。対して、台湾に来てからは退勤時間も早くなり、家族との時間も増えて充実しているそうだ。

お二人は台湾に来て勤務時間が減った理由として、日本には業務の無駄が多いのではないかと推測されていた。具体的には、日本では保守的な考え方から、形式的に作らなければならない書類や手続きが多く、仕事量が多いと指摘していた。勤務時間が多いと、集中力の低下や判断力が落ち、かえって非効率になってしまうことも考えられる。何事も注意深い点は日本企業の魅力だが、長時間労働に繋がるため、効率化を目指して見直していくべきではと思った。

2 つ目の違いは女性の社会進出だ。日本の EY では男女比が男性 7.5 割、女性 2.5 割だが、台湾は逆で男性 3 割、女性 7 割と女性が多なっている。一方、日本では「課長職に何人」と形式的に人数を割り当てているだけに見える部分があり、女性の社会進出はまだ遅れているのではと、橋本先生は感じたそうだ。

ただし、台湾でも上位の役職は男性が多い現状がある。EY 台湾でも上の役職のパートナーは男性ばかりだった。しかし、近年は変化も見られ、台中事務所ではこの 5 年間で新たに就任した 3 人が全員女性であり、上位の役職も徐々に男女平等になってきているそうである。

これから、台湾は日本より女性の社会進出が進んでいる一方で、まだ完全に平等ではないことも明らかになった。しかし、これからは上位の役職も含め、より男女平等が進んでいくと考えられる。そうすることで機械の公平性が保たれ、様々なライフスタイルが生まれるという良い

影響がある。一方で、急激に進みすぎると制度整備が追い付かず、社会の分断を生み出すかもしれないという危険性を孕んでいると思った。

このように、勤務時間によるワーク・ライフ・バランスの違いや女性進出率の違いから日本と台湾を比較することで、日本の働き方の改善点が分かった。

また、ワーク・ライフ・バランスを重視するビジネスパーソンや、現在のキャリアに物足りなさを感じている女性にとって、日本だけでなく海外に目を向けることも一つの選択肢ではないかといえるだろう。

異文化の中で見つけた変化への道

最後に台湾で学んだことや感じ取ったことを紹介する。今回の研修を通して、海外で働くことが、我々にとって刺激的で学びが多いと感じた。もともと海外で働きたい気持ちが強く、様々なことに挑戦したい思い、この研修に参加した。EY 台湾にはそれぞれがやりたいことを実現できる環境があり、台湾自体も日本人が生活しやすい国であることも魅力の一つだった。

実際に台湾に行ってみると、文化の違いや言語の壁に直面することも多く、最初は戸惑うこともあった。しかし、現地で積極的にコミュニケーションを取り、少しずつ慣れていくことで、考え方や表現の仕方にも変化が生まれた。

特に、伝えるのを諦めないことを意識するようになり、意思疎通がスムーズになった。この研修を通じて、異なる文化や価値観を受け入れ、柔軟に対応する姿勢の大切さを学んだ。今後はこの経験を、将来に活かしたいと思った。



チームたなぱっち(石井優成・田中光・土肥いずみ・野中聖矢・藤本優)